

## KIDS CLOWN

天使の笑顔が見たいから。  
クラウンになった、ひとりの若者の物語。

### vol.3 再び海外へ

世界中から集まった  
クラウンスクールの仲間たち



玉井良平 Ryohei Tamai

短大卒業後、2004年にオーストラリアでクラウン（道化師）に出会う。帰国後、保育園に勤務する傍ら、子どもたちの創造力の向上を目指してクラウンを学んでもらう、キッズクラウン講座を立ち上げる。10年にカナダに渡り、日系の子ども達を対象に行なった同講座も好評。今回、クラウンを通して得た体験を初めて執筆。日本のキッズクラウン達を連れて、カナダで海外公演をする事が新たな夢となっている。

[www.child-entertainment.net](http://www.child-entertainment.net)

2010年5月、日本での5年間のクラウン活動を経て、カナダのモントリオールへと旅立った。そして、モントリオールで見たシルク・ド・ソレイユ。観客総立ちのスタンディングオベーションにテントが揺れるのを体感し、鳥肌が立った。

しかし僕のパフォーマンス活動は、フランス語が喋れないことがネックとなり、行き詰ってしまった。「せっかく来たのに…」と途方に暮れていると、トロントにクラウンスクールがある事をネットで知った。藁をもすがる思いでトロントに移った。そしてここで体験が僕の価値観を180度変えた。そこはまさに人種の坩堝<sup>なべ</sup>だった。

クラウンスクールでは、カナダはもとより、実にさまざまな国から、個性豊かな14人の素晴らしいクラウン達が集結し、お互いに刺激し合っていた。何を学んだのか、いくつかここに紹介しようと思う。

カナダで教えられたクラウンの概念は、日本のそれとはまったく違うものだった。ひと口で言うと、必要以上に演じなくて良いということ。必要なのは Feel your emotional movement — 自分の内面の感情を感じる事。そして Contact to the audience — 観客と通じ合う事。特に評価されていたのは「悲しみ」の感情表現だった。演者が涙を流す。それを見て講師もまた涙

目で「Beautiful」といってつぶやく。そんな空間の中がかつて無い感覚を覚えた。

日本では、「道化師＝笑いの天使、癒しの象徴」と教えられ、僕もまた、それがクラウンだと思っていた。しかし、ここで教えられたのは、笑うのではなく、クラウンマスクを通して感じた内面の「リアリティ」を人に伝え、時間を共有する。クラウンは「美しい」存在なんだよ。そんな趣旨の事だった。

笑いを意識しなくて良い。Happy moment だけが表現方法ではない。と教えられた時は、世界がまるで違うものに

変わっていく感覚に襲われた。

今までの価値観を崩し、新しいものを作っていくことは大変な作業だが、このワークショップは不思議なくらい自分の中にスーッと入ってきて、心地よいものを感じていた。

最後の発表の場でステージを降りるとき、この観客から離れたくないと思ったら、自分もまた涙を流していた。静まり返った空間の中に観客と僕と仲間がいて、それがすごく心地良く感じられた。

最終日、すっかり仲良くなったドイツから来た受講者が僕にこう言ってくれた。「おと離れたくない。僕がドイツに呼んだら来てくれるか？ したら一緒にステージに立とう」「もちろんだよ。いつでも呼んで。僕もいつか君を日本に招待するよ」

また、アメリカから来た友人は僕にこんな言葉を贈ってくれた。“Don't follow the rules, 「ルールに従うな」常識に囚われず、自分の信じた道を突き進む彼女らしい言葉が僕の心に深く残った。「僕も信じた道を歩んでいこう」友人が、温かくそれでいて力強く、背中を押してくれたような気がした。

気がつくくと、全員がハグをしていた。5週間の厳しくもハートフルなワークショップを終えて、1つの大きな家族が出来た瞬間だった。

